南葵音楽文庫ミニレクチャー　vol.21 記録

頼貞・ケンブリッジ大学入学試験

泉　健（和歌山大学名誉教授）

2018 年 7 月 21 日 （土） 11：00

南葵音楽文庫閲覧室（和歌山県立図書館内）

南葵音楽文庫
和歌山県立図書館内
和歌山市西高松 1-7-38
tel.073-436-9500

徳川頼貞は 21 歳の時にケンブリッジ大学に留学しました。今回はその時のネイラー博士のレッスンへの入門試験の様子と、課題曲であったシュテファン・ヘラーの「コンソレーション」という曲のことを振り返ってみたいと思います。試験は次のような内容でした。

まず音楽の基礎的な知識を問ういくつかの質問、次に話している声の調子や聴こえてくるチャイムの音階に関する質問、そしてピアノの実技試験。これはまず初見視奏、次にその曲を移調して弾くという課題で、その曲がシュテファン・ヘラーの「コンソレーション」（1853 独・仏版、1900 米版）でした。最後に聴音の試験。これは単旋律なのか、和音なのか、楽曲なのかによって難易度が異なりますが、その種類は書いてありません。そして次に書き取った楽譜を移調するという課題でした。

徳川頼貞『薈庭樂話』には、「試験はこれで終わった。私は幸いネーラー博士の許に入門することが出来て、ピアノと同時に和声学を学習することになった」と書いてあります。しかし、「コンソレーション」の初見視奏と移調奏はかなり難しいものです。頼貞氏は一体どれくらい弾けたのでしょうか。

シュテファン・ヘラー(1813-1888)は、日本ではあまり知られていない作曲家ですが、19 世紀後半にはウィーン、ベルリン、ライプツィヒ、パリなどの音楽院で、生徒に彼の作品の演奏が推奨された著名な音楽家でした。ユダヤ系の両親のもとにハンガリーで生まれ、ドイツで音楽を学び、パリで活躍したおかげで、ドイツとフランスの両方の音楽的様式を身に付けています。作品はほとんどピアノ曲で、初期の編曲は、フランス人にシューベルトの歌曲を伝える役割も果たしています。

「コンソレーション」は、全 18 曲の性格的小品からなる『花の絵、果実の絵、茨の絵（眠れない夜）』の 13 曲目の作品です。変ニ長調、6/8 拍子で、シンコペーションが多く、初見視奏にはなかなか手強い曲です。

【ヘラー,S.の肖像】上田泰史『19 世紀ピアニスト列伝』より